

会  
議  
用

調査書に関するアンケートの集計報告

昭和48年6月

国 立 大 学 協 会  
才 2 常 置 委 員 会

## ま え が き

第2常置委員会においては、大学の入学者選抜における調査書の活用について意見の交換を行なっている間に、初めに調査書のもつ選抜方法としての妥当性に関していくつかの大学で行なわれた追跡調査の結果を比較検討した。

さらにその間各大学で調査書の活用の仕方がさまざまであることからまず活用の実態を明らかにすることが今後の討議をすすめていく上に重要な手がかりを与えてくれるものと考えた。

そこで本委員会では、アンケートの方法で許される限りの出来るだけ詳細な仕方で、調査書の活用の実態、阻害要因と考えられているもの、将来への構想をとらえてみた。従って集計報告としてのまとめも、単に数量的な処理をするに止めず、個別の実態を明らかにすると思われる自由記述の部分にも重点をおいてみた。

初めに予想していた所をはるかに越えて、各大学から積極的かつ詳細な記述が得られたことについては、本委員会では深く謝意を表するとともに、この問題についての各大学の深い関心をあらためて感じさせられた次第である。

報告書で読みとっていただけるように各大学での調査書活用の実態は、まことにさまざまであるが、総じていうならば、一般に考えられがちな程度を越えて、各大学では調査書の活用について積極的な姿勢をもち、また実際にも多くの工夫をもって現に活用しているといえること、高校間格差とか、調査書の客観性、信頼性とかに、阻害要因を感じながらもそれを乗り越えるためにさまざまな方策が考案されていることが見られる。

本委員会では、これらの実態が調査書活用のあるべき形態、またあり得る形態について有力な手がかりをあたえてくれるものと考え、さしあたり各大学が

入試方法の検討の一助として活用されるためにまとめを試みた次第である。

調査期日	昭和47年6月28日
照会大学数	76大学(305学部)
回答大学数	76大学(305学部)

## 第2常置委員会（学科課程・入学試験等）名簿

（昭和48年6月現在）

○印 とりまとめ小委員

委員長	○谷田 関次	お茶の水大
委員	○松永 藤雄	弘前大
〃	実方 正雄	小樽商科大
〃	黒沢 誠	岩手大
〃	○石原 恵三	群馬大
〃	○小山 正一	東京商船大
〃	長崎 明	新潟大
〃	○丸井 文男	名古屋大
〃	佐野 幸吉	名古屋工大
〃	釜洞 醇太郎	大阪大
〃	高橋 陸男	大阪教育大
〃	○菅 好雄	岡山大
〃	山岡 亮一	高知大
〃	黒田 正巳	熊本大
〃	中村 末男	鹿児島大
専門委員	○肥野田 直	東京大教授
〃	○安倍 北夫	東京外語大教授
〃	○小西 勇雄	東京教育大教授

（注） ○統 有恒教授（名古屋大）は当初より関係されて

いたが、昭和47年9月25日逝去された。

## 調査書についてのアンケート

**記入上の注意** 全学同一の場合には、各問の下にある表の、左端にある「全学」の欄のみに記入して下さい。学部によって相違のある場合には、学部毎に記入して下さい。表にあげてない学部があるときには、右方の空欄を用いて、学部名（略称）も示して記入して下さい。

才1問に対して、利用したと答え（Aと記入し）た大学または学部では才2問と才4問について記入して下さい。利用しなかったと答え（Bと記入し）た大学または学部では才3問と才4問について記入して下さい。なお、年度によって異なる場合には、代表的な年度について答えて下さい。

**第1問** 入学選抜の際、出身学校長の提出する調査書を、選抜の資料として利用しましたか。年度別に〔 〕内の英字を記入して下さい。

〔A〕 利用した。

〔B〕 利用しなかった。

年度 \ 学部	全学	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農		
昭和45年度													
" 46年度													
" 47年度													

### 〈回答のまとめ〉

利用学部の割合を年度別に百分率で示したのが図(1)である。

年度別の変化を見ると、45年度に利用した学部は、全部3年連続利用しており、46年から利用した学部は5、46年度のみ利用した学部は1、47年度のみ利用した学部は2である。

これを見ると、利用状況は、ほぼ定着していると思われるが、微増の傾向である。（第5問参照）

なお、学部別の利用状況は、学部の名称が多様に亘るので的確に分類集計することはできないが、法・政・経・商の学部群が最も利用率が低く（57%）、次に医・歯・薬の学部群が低い（73%）。ただし、学部数が僅少である美・音・体等は別とする。

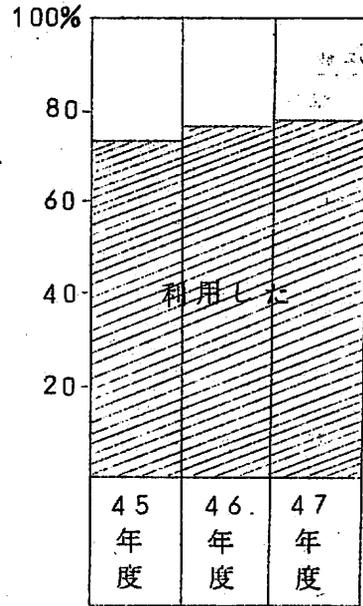


図 (1)

**第2問**

前問でAを記入された大学または学部では、下記の(2-1)～(2-3)にお答え下さい。年度によって異なる場合には、代表的な年度について答えて下さい。

(2-1) 調査書を、どのような場合に利用しましたか。下表の該当するところにすべて、○印を記入して下さい。説明が必要な場合には、表の下の余白に記して下さい。

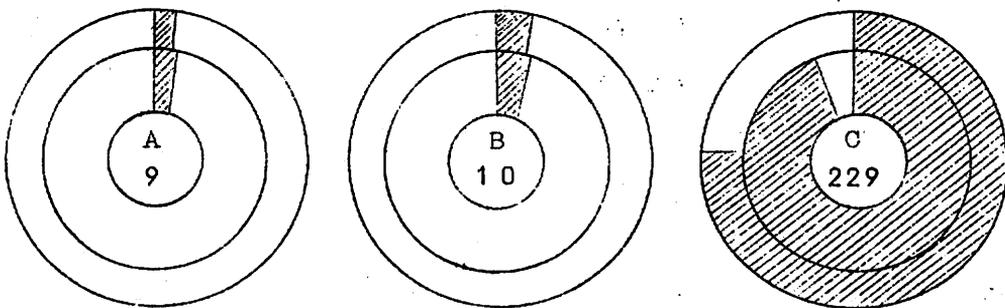
[A] 一次選抜のとき用いた。

[B] 推せん入学者の判定に用いた。

[C] A・B以外の一般の受験者の合否決定の際に資料として用いた。

学部 場合	全学	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農			
A														
B														
C														

〈回答のまとめ〉



図(2)

(2-1)に対する回答を示したのが図(2)の円グラフで、中心に示したA, B, Cの下の数字は、それぞれの使い方をしたと答えた学部の実数である。

外側の環状部は全学部数に対する、内側の環状部は(2-1)について回答が記入された学部数に対する、それぞれの用い方をした学部の割合を示す。

A・B・Cの学部数合計248が、この項に対する回答学部数237を越すのは、例えば、BとCの両方に記入された学部があったからである。

(2-2) どのような用い方をしましたか。下表の該当するところすべてに○印を記入して下さい。また、各項について求めている( )内事項について、下の余白に、学部名等の見出しをつけて、付記して下さい。

学部内の学科で異なるときは、すべて記入して下さい。

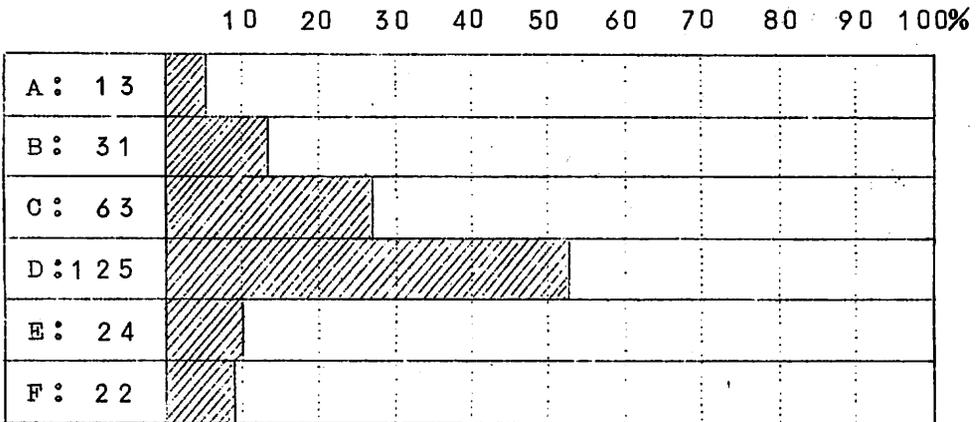
- (A) 筆記試験を行わず、主として調査書で選抜した(面接を行なった場合、小論文を提出させた場合など、併用した方法があれば、それもお知らせ下さい)。
- (B) 調査書の内容を点数化し、筆記試験の1科目に準じて扱った。(総点に加算したときには、その配点と得点の幅、できれば標準偏差をお知らせ下さい。総点に加算しないときには、どのように判定資料としたか——例えば何点以下は排除するなど——をお知らせ下さい)。
- (C) 点数化または階級分けを行なったが、副次的な資料とした(学力検査の総点の同点者の順位づけに用いたとか、ある幅での及落境界の者について優先資料としたか、欠格条件にしたなど、その用い方もお知らせ下さい)。
- (D) 点数化や階級分けはしないが、合否判定の参考にした。  
(例えば、総点が合格圏にあるが、1科目が著しく悪いとき、調査書によって、その科目の力を補正して考えると、出席状況や行動及び性格の記録に注目すべき事項があるときそれを参考にするなど、用い方もお知らせ下さい。)
- (E) 大学または学部で、調査書に④の記入を求めており、④の者を有

利に扱った(その方法もお知らせ下さい)。

〔F〕 その他(どのような扱い方が概略を記して下さい)。

### 〈回答のまとめ〉

まず、この問に対する○印の記入状況を示したのが図(3)の帯グラフで、数値は実数を示し、百分率は、(2-2)に対して回答が記入されていた学部総数に対する割合である。



図(3)

この問では、それぞれの用い方について、かなり詳しく記載された回答が多かった。それらを統計的に処理することは困難であるので、概ね回答の選択肢に準じて分類し、大体の傾向や代表的な例を記すことにする。

(A) 筆記試験を行わず、主として調査書によって選抜する場合

これは、図(3)が示すように、少数であるが、さらに次の二つの場合に分けられる。

(A-1) 第1次選抜に用いる。

その例として、ある人数までを学力検査受験資格者として選ぶ場合、特に成績不良の者を何割か除く場合がある。

(A-2) 推せん入学者の選抜資料とする。

この場合には、④の標示、学校長の推せん書を求めた上、書類選考の合格者に対して、面接を行ない、小論文を課したり、さらに簡単なテストを行なったりするものが多い。

(B) 調査書の内容を点数化し、学力検査の得点と合計し、総合得点によって選抜する場合

この方法が記入されている学部は約20であり、学力検査の満点の $\frac{1}{2}$ に相当する満点を配したのから、調査書の評定平均値をそのまま学力検査の総点に加算するものまで、配点にかなりの幅が見受けられる。

配点の方式として、よく用いられるものに次の二つがある。

- ① 評定平均値×(ある定数)+概評の点数
- ② 評定平均値×(ある定数)

これらの場合、満点を100点とするものが多く、概評の点数化は、④、A、B、C、D、Eの各々に分けて配点するもの、④のみ高く評価するものなど、いろいろある。

また、少数ではあるが、教科・科目の学習記録を点数化して用いるところもある。

なお、特殊な例として、入学定員中の何割かを、学力検査の成績のみで定め、残りの何割かは、調査書を点数化したものを学力検査の得点に加えたもので選抜するところがある。

(C) 及落の境界にある者の合否の判定に用いる場合

利用法が具体的に記載されたものの中では、この場合に相当するものが最も多く、全体の $\frac{1}{4}$ に近い。その中には

- (C-1) 学力検査の得点の同点者の順位付けに用いる。
- (C-2) ある幅での及落境界内の者について用いる。

と明記されたものと、その何れとも明記されていないものがある。

(C-1)については、学力検査の同点者を、調査書のどのような評価によって順位付けするか明示されていないものが大部分であるが、

① 調査書を点数化または階級分けして用いる

② ④表示者を優先させる

と記されているものが少なくないので、これらに近い方法によるものと予想される。特殊な例として、志望科の教科・科目の学習記録を用いるものもある。

(C-2)についても、(C-1)の場合と同じ傾向である。

特別なものとして、3年次の全科目について、学部独自の方針で評定平均値を算出し、その上位者は境界線より下でも、ある点までなら合格とするものがある。また、出席状況を参考にすると記されたものもある。

(D) 欠格条件あるいは要注意条件として用いる場合

これらの例として、次のようなものがある。

- ・ 学習成績概評がD以下のものは欠格とする。
- ・ 学習成績概評が悪い者について詳しく検討する。
- ・ 学習成績概評がD以下の者については、「学習についての所見」「行動および性格の記録」「その他の事項」などを参考に決定する。

(E) 総得点が合格圏内にあるが、特に得点の低い科目がある場合の補正に用いる場合

このような用い方を記された学部は(C)に次いで多く約30に及ぶ。その多くは「1科目が著しく悪いとき」とあるが、「1科目の成績が最低限を下廻るかそれに近いとき」、「該当科目受験者の平均点を著しく下廻る場合」、ある科目で定めた「足切点以下の場合」などの明記されたものもある。これらの場合、該当科目の学習成績のみでなく、出欠、健康記録等も参考にすることもある。

(F) 副次的資料として参考とする場合

これには

- (F-1) 出席状況、健康の記録、行動及び性格の記録を参考とするもの
- (F-2) 学習成績も含めて参考とするもの

があるが、後者は実質的に(D)もしくは(E)と大差ないと見られる。すなわち、(D)、(E)では(F-1)に示した諸項目の明記されていないものが多いが、次の2-3の回答から推察されるように、これらも参考にされていると見られる。それで、ここでは(F-1)を主にして、記載例を若干記すことにする。

- 成績概評、評定平均値、出欠の記録、健康の記録、行動および性格の記録に注目すべき事項があるときは、これを参考にする。
- 学習成績、健康状態などを軽く参考にする程度。
- 出席状況と健康の記録等により肢体不自由者の合否判定の参考にする。
- 長期欠席、病歴等をチェックする。
- 1年を通してその出席状況が著しく悪い者については、行動・性格の記録等を参考にする。
- 出席状況、行動および性格の記録に注目すべき事項があるとき参考とした。

(4) その他

選抜以外の利用であるが、「入学後の追跡調査に利用している」との記載もあった。

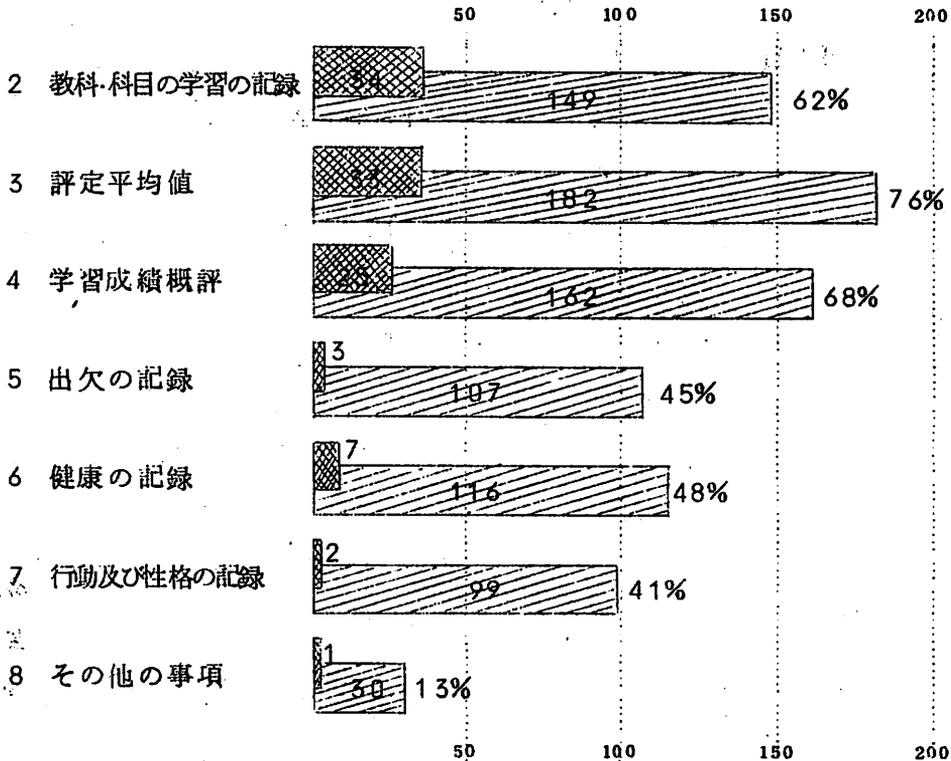
(2-3) 調査書のどの部分を利用しましたか。該当するところすべてに○印を、特に重視したところには◎印を記して下さい。

また、各項目について、点数化または階級分けを行なった場合には、その方法を表の下の余白に記して下さい。

調査書の項目	学部	全学	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農
2 教科・科目の学習の記録												
3 評定平均値												
4 学習成績概評												
5 出欠の記録												
6 健康の記録												
7 行動及び性格の記録												
8 その他の事項												

〈回答のまとめ〉

この間に対する回答の実数を示したのが次の図(4)である。なお、%は(2-3)の回答数に対する該当回答の百分率である。



図(4) 〰〰〰〰は◎ //〰〰は○

点数化または階級分けを行なう方法について回答は、次のように分類することができる。

- (A) 教科・科目の学習記録について行なう。
- (B) 評定平均値について行なう。
- (C) 評定平均値と学習成績概評について行なう。
- (D) 上記のものに、教科・科目の学習の記録も加える。

さらに、出欠、健康、性格及び行動の記録等も含める。

(E) その他総合的判断によるもの。

(2-2)について回答からみると上記の(B)または(C)の方法が多く用いられているようであるが、(2-3)について回答では、(記載の重複を避けたためか)特にその傾向は見られない。

以下、代表的な例をいくつか具体的に紹介する。

(A)の例(1) 第1資料として最終学年の全教科・科目の平均評価点を10段階に区分したものの、第2資料として国、社、数、理、外国語の5教科について全学年間の平均評価点を用いる。

a) 5教科を総合した平均点は10段階に。

b) 各教科ごとの平均点は5段階に区分する。

(2) 各教科の学年別単位数に評定点を乗じて合計したものを履修単位数で除して平均を出し、それを50倍する。

(3) 国語50点、数学100点、物理50点、化学50点、英語50点、合計300点の配点による点数化

(4) 当年度の卒業見込みの者を対象とし、最高評価(5段階評価の場合は5)の科目の数により評価する。ただし保健体育、芸術及び家庭を除く。学校規模、履修課程、地域差および従来の入学試験成績の実績等も考慮する。

(B)の例 評定平均値を何倍かして点数化する方法で、乗数として、1から80までいろいろある。(2-2)の回答も参考にすると、10~20の場合が多い。

(C)の例 (2-2)の回答も参考に紹介すると

(1) 評定平均値×10+概況(Ⓐ=50, A=40, B=30, C=20, D=10, E=0)

(2) 評定平均値×18 ただしⒶは10点加算

(3) 評定平均値と学習成績概評を考慮してA, B, C, Dの4段階に分ける。

D)の例(1) 教科・科目の学習の記録、評定平均値および学習成績概評を資料としてA, B, C, D, Eの5段階に分ける。

(2) 教官3名を調査書採点者とし、調査書の各項目全体を通してそれぞれ評価し、3名の総合評価点の平均を以て調査書の点数とする。

(3) 教科・科目の学習の記録を中心とし、評定平均値、学習成績概評、行動および性格の記録、および学校差を加味し次のようにA, A', B, B', Cの5段階に分ける。

A 5が大半のもの

A' 5に4が混ったもの

B 4が大半、3が若干あるもの

B' 3が大半、2が少しあるもの

C B'以下のもの

(4) 項目	配点	基準
学習成績概評	10	④-10 A-9 B-8 C-7 D-6 E-5
出欠の記録	3	殆んど出席-3 少々欠席-2 欠席多い-1
行動および性格の記録	3	A-3 B-2 C-1
課外活動	2	顕著-2 普通-1 無記-0
人物所見	2	優-2 良-1 可-0

(調査員5名 計100点満点)

回)の例 多数の教官が、それぞれの方法で評価したものを集計し判定に供している。

**第3問**

第1問でBを記された大学または学部では、下記の間にお答え下さい。年度によって異なる場合には最近の年度がBであるときに本問に答えて下さい。

どのような理由で利用しなかったか。下表の該当するところに、最も主なる理由(一つ)は◎印を、それに次ぐ主なる理由は○印を記入して下さい。

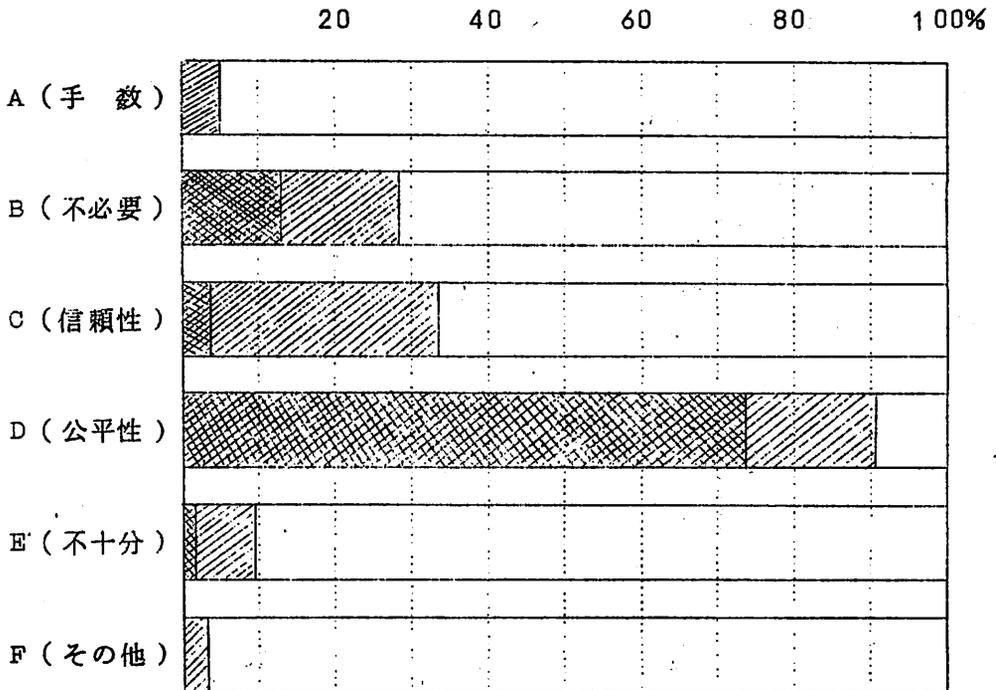
なお、E、Fに限らず、必要な説明は表の下の余白に記して下さい。

- [A] 手数がかかり、それに応じられない。
- [B] 選抜の資料としては、大学の実施する学力検査等だけでよい。
- [C] 調査書は、資料として信頼性が乏しい。
- [D] 地域差や学校差があり、その調整ができないので、公平な客観的な資料としては使えない。
- [E] 必要な事項で記入されていないものがある(例えば、卒業後の学力の向上など、その事項をお知らせ下さい)。
- [F] その他(その理由がわかるよう説明して下さい)。

学部 理由	全学	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農			
A														
B														
C														
D														
E														
F														

〈回答のまとめ〉

問3に対して回答されたのは、63の学部であるが、回答における各選択肢の頻度を、この学部数に対する百分率で示したのが図(5)である。網目の部分は◎印、斜線の部分は○印の頻度を示す。



図(5)

**第4問**

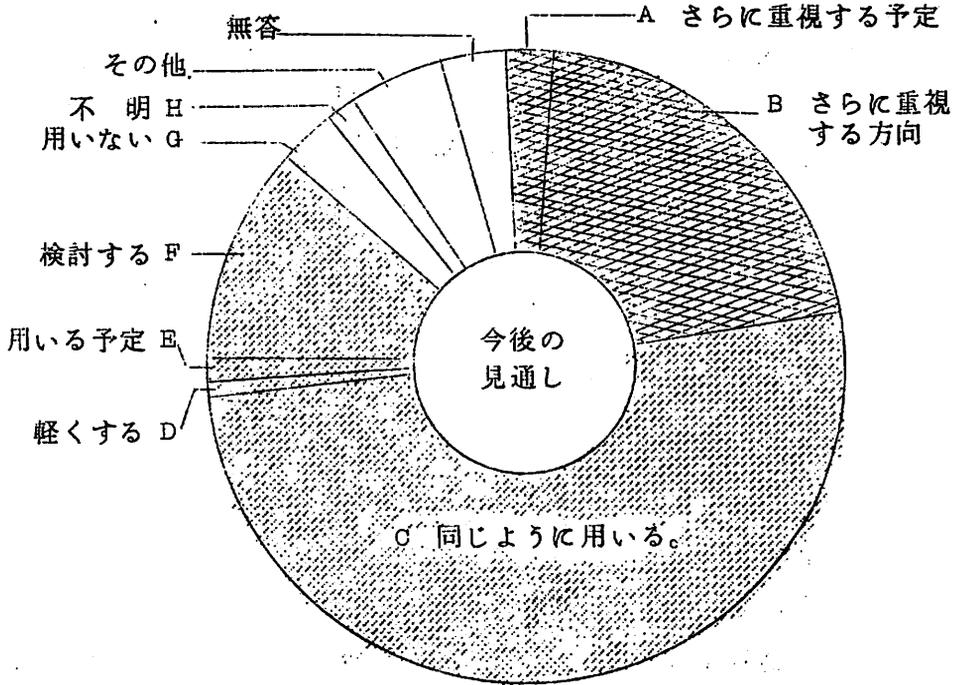
どの大学または学部も下記の間にお答え下さい。

調査書の利用について、今後どのような予定または見通しですか。下表の該当するところに○印を記入して下さい。また、調査書の改善についてご意見がありましたら記入して下さい。

- 〔A〕 今までも用いてきたが、今後さらに重視する予定である。
- 〔B〕 今までも用いてきたが、今後さらに重視する方向で検討する予定である。
- 〔C〕 概ね今までと同じように用いていく見通しである。
- 〔D〕 今までは用いてきたが、今後は用いないか、または、軽く参考にする予定である。
- 〔E〕 今まで用いなかったが、近い将来には利用する予定である。
- 〔F〕 今までは用いなかったが、用いるかどうかを検討中、もしくは近く検討する予定である。
- 〔G〕 今までも用いなかったが、今後も用いない見通しである。
- 〔H〕 今までは用いていないし、今後どうするかについての学(部)内での意見の交換も行なったことがない。

学部 方向	全 学	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農			
A														
B														
C														
D														
E														
F														
G														
H														

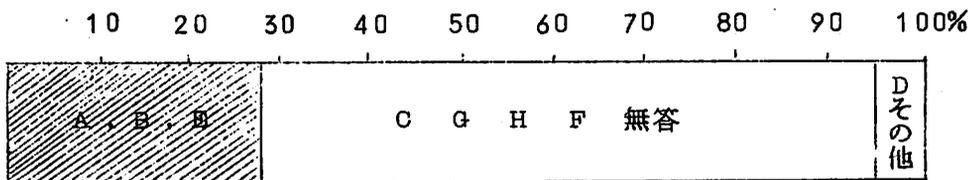
〈回答のまとめ〉



図(6)

この問の各分岐の選ばれた割合を示したのが、上の図(6)の円グラフである。これを、今後さらに重視して用いると予想されるもの、今まで通りかまたは何らかの形で用いようとするもの、その他に分類して見られるように影などをつけた。

また、程度は別として、今までよりは利用を高めようとするもの、今までと変わらないと予想されるもの（無答も含む）、これまでよりは軽くなるかもしれないもの（その他を含む）に分けて見られるようにしたのが、下の帯グラフである。



調査書改善についてのご意見 学部によって異なるとき様々学部名の見出しをつけて記入して下さい。

### 〈回答のまとめ〉

この間に対する回答は14あった。第3問に重複するところが多いがその内容を分類すると(A)から(F)までの6項目に分けられる。

〔A〕 評定の基準について、高校間の差を調整する必要があるという意見

その例として、次のようなものがある。

- ・ 調査書に現われる学校間の格差の是正が必要である。
- ・ 評定基準をできるだけ客観的に定め、全国的に統一して行なわれるようにする必要がある。

〔B〕 評定方法に関する意見

次のような多様な意見がある。

- ・ 絶対評価の全国的基準が明確に示されないならば、むしろ相対評価のほうが判断しやすい。
- ・ 5段階評価を10段階または点数表示にしてほしい。
- ・ 全体の中での席次を明記してほしい。

〔C〕 記載内容の信頼性についての意見

その例として、次のようなものがある。

- ・ 事実を重視した公正な報告書を作成してほしい。
- ・ 評定平均値の計算違いが5%近くあるので調査書を利用するために再計算しなければならない。
- ・ 学習成績概評と評定平均値の平均との対応が不適切なもの、学習成績概評の記入漏れなどがある。
- ・ 記入不備や誤記がある。

- ・ 評定平均値の誤りをチェックするために、評定平均値の合計と履修単位数を記入するとともに、学習成績概評と対照しやすいように改善する。

〔D〕 調査書の様式についての意見

普通科高校とその他の高校、工業高専、検定などの調査書の様式を統一してほしいという次のような意見がある。

- ・ 実業高校（工、商など）および工業高専などと普通高校の評定平均値を対照できるようにしてほしい。
- ・ 文部省検定試験の受験者の調査書と高等学校の調査書の評定方法が異なるために判定資料としての取り扱いが困難である。

〔E〕 高校卒業後の状況の記載についての意見

いわゆる浪人の場合、調査書に卒業後の状況を記入することが要望されている。たとえば次の例がその一つである。

- ・ 卒業後浪人中の評価もなしうるものでありたい。

〔F〕 その他の意見

調査書の改善について次のような意見がある。

- ・ 調査書の記載事項の設定に大学側が積極的に参加してその要求を明示し、高校側の諸事情とも調整・検討を行なう必要がある。